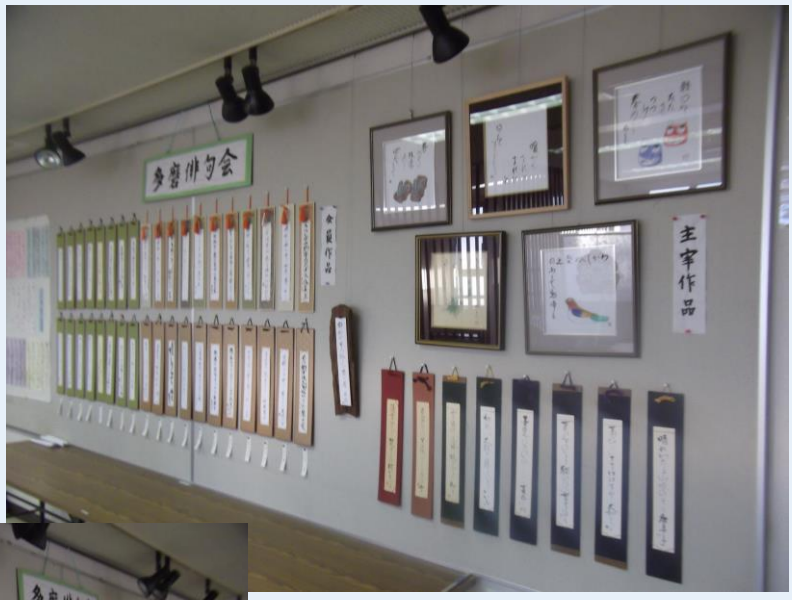
## グループの名称　：　多磨俳句会

| 活動内容の紹介 | | | |
|---|---|---|---|
| 活動日時 | 毎月　第２日曜日　南街句会<br>毎月　第３水曜日　中央句会<br>毎月　第３木曜日　種 句 会 | | |
| 会　費 | 本会機関誌代　月１，０００円<br>各句会　毎月１，５００円 | 会員数 | 約９０名 |
| 講　師 | 主宰　　関（せき）　成美（しげみ）　先生 | | |
| 活動拠点 | 南街公民館<br>中央公民館 | | |

【その他】

主な活動　　句会毎に講師をお呼びし、指導を受けています。

＜作品展示の様子＞　※今年度は、南街公民館のロビーを使用して展示しました。各作品の拡大写真も掲載していますので、是非ご覧ください。



ロビー展示の様子（全景）

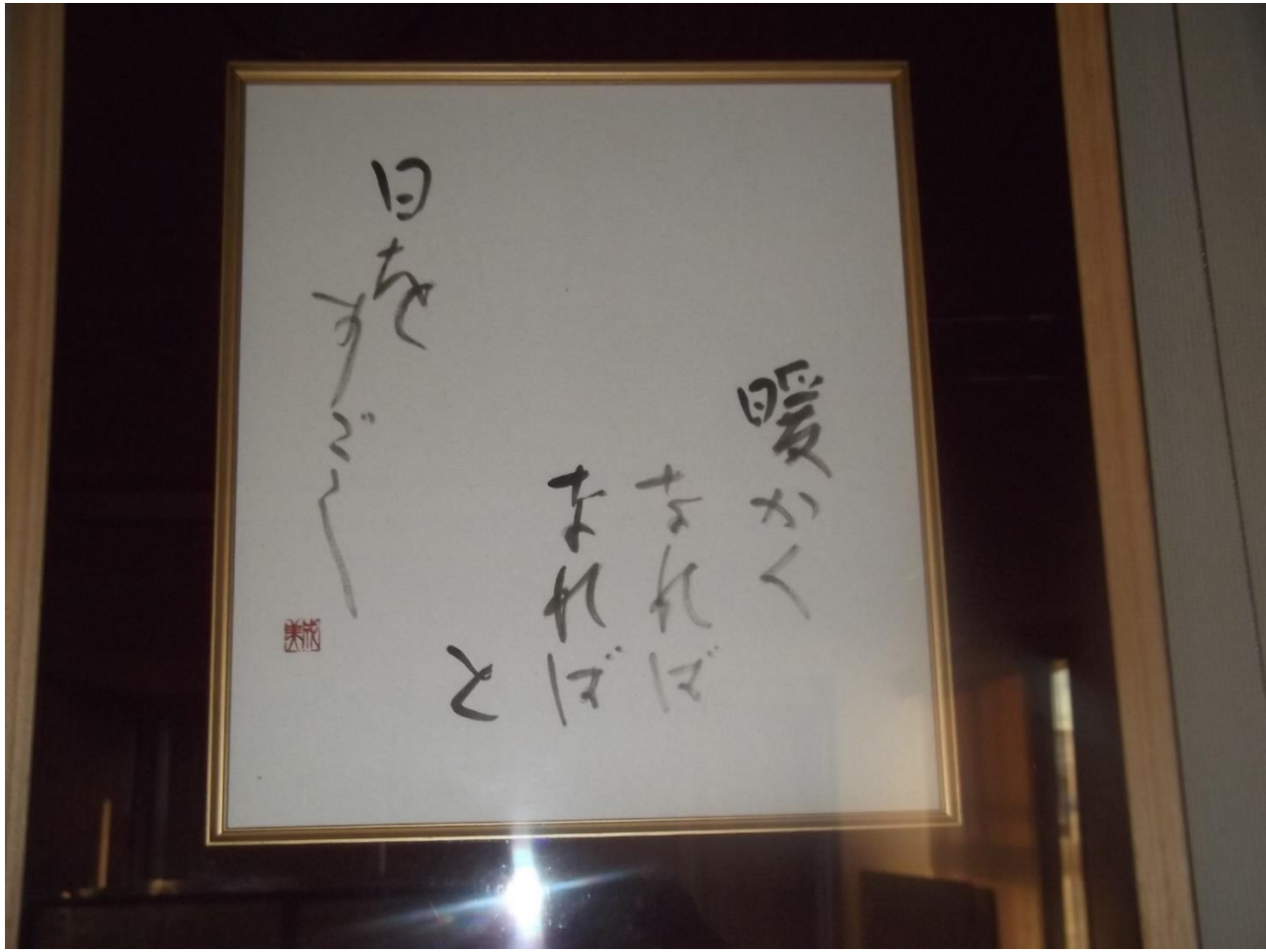
多磨俳句会が、合同まつりに合わせて展示した作品をご覧ください。

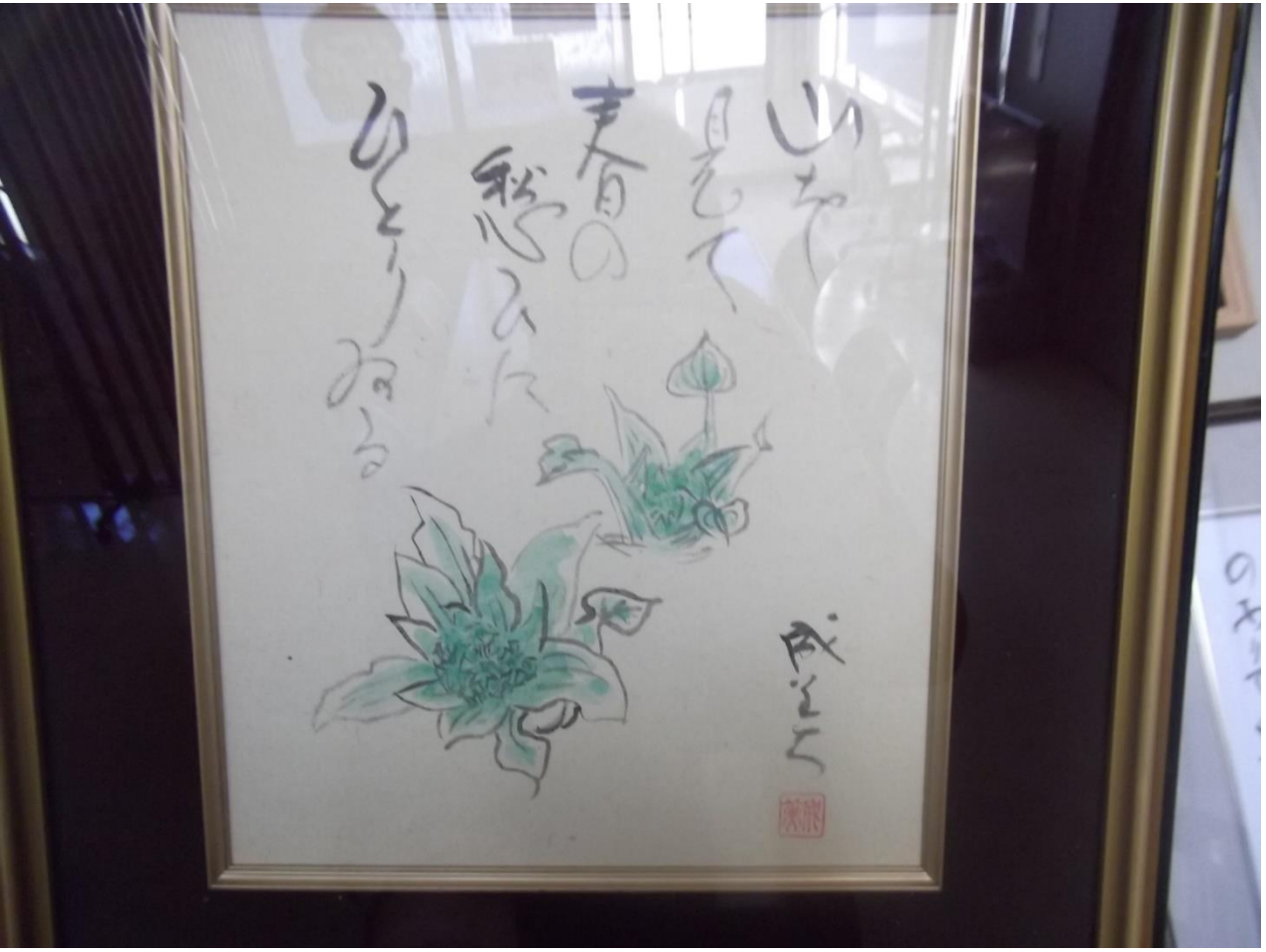
多磨俳句会
川本 嘉 抄本

軽口を
たたき
つつ
しく
春めくこと
成るて

主宰作品

春
めくと
外濠
通り
四谷まで


暖かく
なれば
なれば
と
日を
すごく


山で
見て
実の
恋ひた
ひとりぬる

わがうらぬれ
の土
ありて鳥帰る

晴れわたる山峡のそら　啓子

葛切りのちちはしみじみ和かなり

黄ひまわりのなかを猫の仔の育ちゆく

墨東に夜の雨しらく夏去りぬ

秋風の大鼓を張りにあすといふ

雨に雀のこゑ風に抗ひゐるを知る

豆腐屋の早寝につづる夜の雪

落葉焚き焚きて何か失へる

# 多磨俳句会

会員作品

うつし世の約束なれば木瓜真赤

晩秋の林に寺地蔵尊

居酒屋が憩ひの場所や桜桃忌

蝸螺の枯れて耀ふ岩ながら

かくしきれざる看取りの疲れ萩ごろも

日向ぼこ妻の背中に凭れる児
美代子

ベランダに出し夫偲ぶ星月夜
あい子

切干の残れる日の匂ひ

共白髪の寄り添ひてゐし夜寒ぶる

冬耕の終りし畑の広々と三林

紅葉やう紅葉と並べ紅葉やう

老鶯や鎌倉古道苔に消え

もの倒すほど気負ひて三尼の長

火葬場の呼び呼ばれて浮かんだる夏蜜柑

よろめきて先駆けがりし酔芙蓉

十月一日の空を老いて仰ぐ
沈男

愚痴ほろりほろりと落す夜寒かな

街道の並木すっかり黄葉す
美代子

冬薔薇趣味の俳句は生きる糧
あい子

何となく声を開め直す冬初め

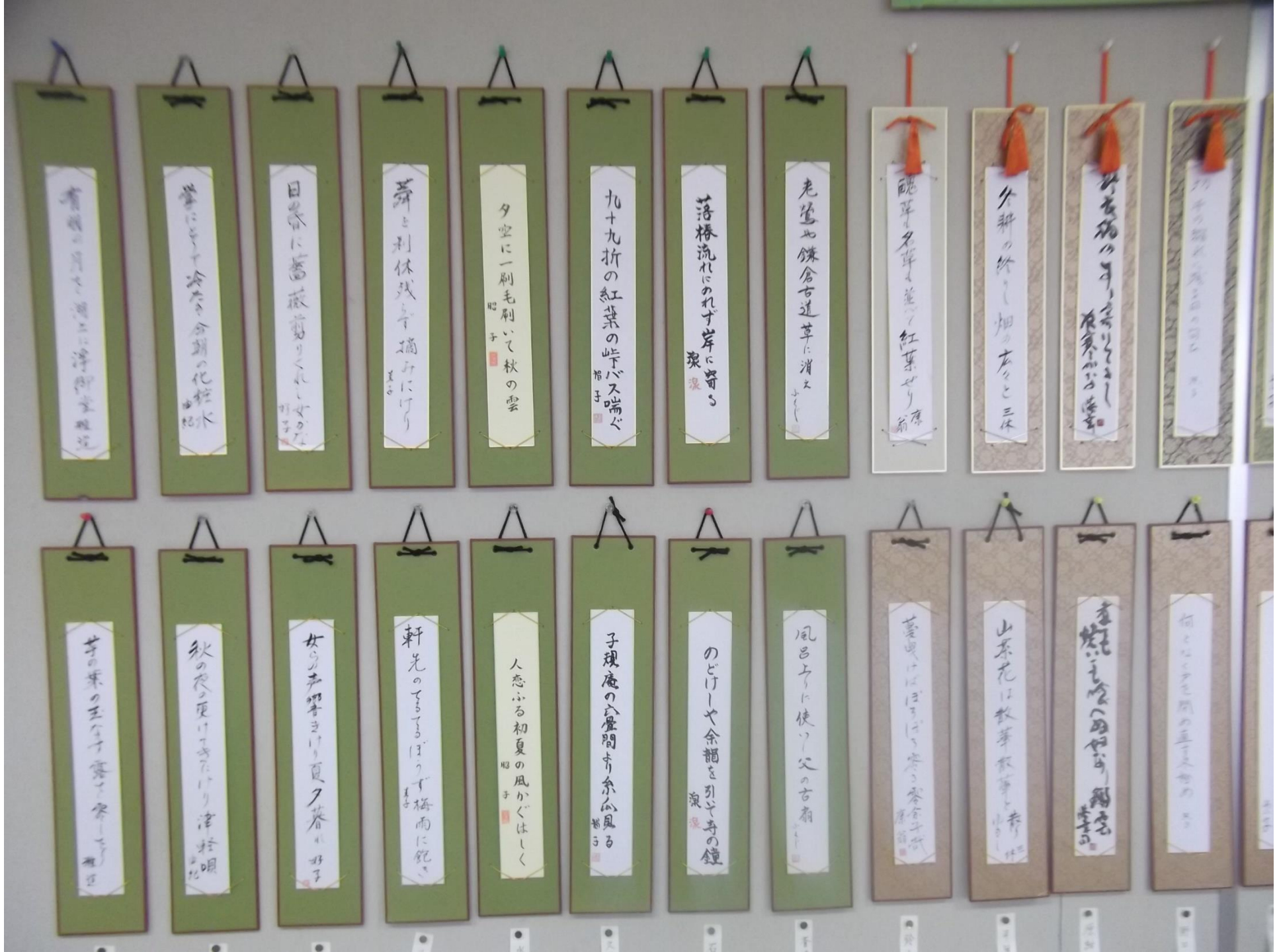
焚き火会の母の日なり鍋焼
[illegible]

山茶花は散華散華と散り
小さし

蔓薔薇はぼろぼろ咲く春金平糖
[illegible]

風呂上りに使ひし父の古扇
[illegible]

御仏の百人詠んで百の春
[illegible]


老蘇も鎌倉古道草に消え
落椿流れにのれず岸に寄る
九十九折の紅葉の峠バス喘ぐ
夕空に一刷毛刷いて秋の雲
蕨と利休残らず摘みにけり
日暮に薔薇剪りくれし女かな
夢にそて冷たき今朝の化粧水
蓮花の枯れし池に浮御堂
蓮葉の名残を並べ紅葉ぜり
今年の終りし畑の唐芋と三体
風呂上りに使いし父の古扇
のどけしや余韻を引く寺の鐘
子規庵の六畳間より糸瓜見る
人恋ふる初夏の風かぐはしく
軒先のてるてるぼうず梅雨に飽き
女らの声響きけり夏夕暮れ
秋の夜の更けゆくままに津軽唄
芋の葉の玉なす露と零れ
蓮葉はぼうぼうと冬の冷奈川
山茶花は散華散華と散りにけり
何となく子規の面影人恋ふる

# 川本薫抄本

山笑ふすこつたくてたまらぬと　[illegible]

火の山はあ山にして落ちつかず　[illegible]子

草餅のまだ温かくやはらかき　美代子

山寺に日めくりでよみ二月尽　[illegible]子

美なく言ちくれしよ雛飾る　美代子

水かけて勢いつける神輿かな　[illegible]

万歩を抜けきし風を深く吸ふ　[illegible]

ぼくはいまいそぞあるますかたつむり　[illegible]

空梅雨の久しく雨を待つ大地　[illegible]子

なりきつて歩けば蓮の花かな　[illegible]

節きりきりと心きりけり初詣　[illegible]

十二支に這入れぬ猫と寝正月　[illegible]男

老いてなほ夢書く読む初日記　[illegible]

井戸神へ手に乗るほどの鏡餅　[illegible]子

化け猫のきらびやかなり初芝居　[illegible]子

春は日はとかくさびしかり　[illegible]

寝ころべば草の芽色のかおいと　[illegible]

みちのくは一望千里麦の芽　[illegible]

南瓜煮る母の好みにすこ煮る　[illegible]

意地悪をひとつしまして神に祈る　[illegible]

根菜をごうごうと煮て冬初め　[illegible]

鍋底を火の舌が這ふ夕時雨　[illegible]

灯さねば一人の家はなほ寒し　[illegible]

そのことに触れずに二人日向ぼこ　[illegible]

強きごとは書かじと決めて日記買ふ　[illegible]

うつし世の約束なれば木瓜真赤

かおる

晩秋の林に赤し地蔵尊

静子

居酒屋が憩ひの場所や桜桃忌

保

蝙蝠の枯れて羅漢の指にすがる

次男

かくしきれざる看取りの疲れ萩こぼる

ぎん子

日向ぼこ婆の背中に先れる児

美代子

ベランダに出て夫偲ぶ星月夜

あい子

切干の縮れに残る日の匂ひ

照子

終夜猫のまり音聞きし

夜寒かな

陸幸

冬耕の終りし畑の広々と

三休

醜草も名草も並べて紅葉せり　康翁

老鶯や鎌倉古道草に消え　ふくじ

落椿流れにのれず岸に寄る　泉

九十九折の紅葉の峠バス喘ぐ　智子

夕空に一刷毛刷いて秋の雲　昭子

蕣を利休残らず摘みにけり
美子

日の昏に薔薇剪りくれし女かな
好子

掌にとって冷たき今朝の化粧水
由紀

有明の月を湖上に浮御堂
雅道

軒先のてるてるぼうず梅雨に飽き

美子

女らの声響きけり夏夕暮れ

好子

秋の夜の更けてきたけり津軽唄

由紀

芽の葉の玉なす露と零しとり

雅道

人恋ふる初夏の風かぐはしく
昭子

子規庵の六畳間より糸瓜見る
菊子

のどけしや余韻を引いて寺の鐘
泉

風呂上りに使ひし父の古扇
ふくじ

蔓曳けばぽろぽろ零る零余子哉
康翁

街道の並木すっかり黄葉す
美代子

冬薔薇趣味の俳句は生きる糧
あい子

何となく戸を閉め直す冬怡め
照子

[illegible]

山茶花は散華散華と散り
ゆきし
三休

もの倒すほど風吹いて三鬼の忌
かおる

火群なす畔で染めたる曼珠沙華
静子

よろめきて凭れかかりし酔芙蓉
保

十六夜の空を老いて仰ぐ
次男

愚痴ほろりほろりとこぼす夜寒かな
和子

俳句に華を添えるように、綺麗な植物画を展示しました。

沢山ある作品の中から、その一部を紹介しますので、是非ご覧ください。

平成十一年五月
多摩川 柳岳にて

貳瓢山人

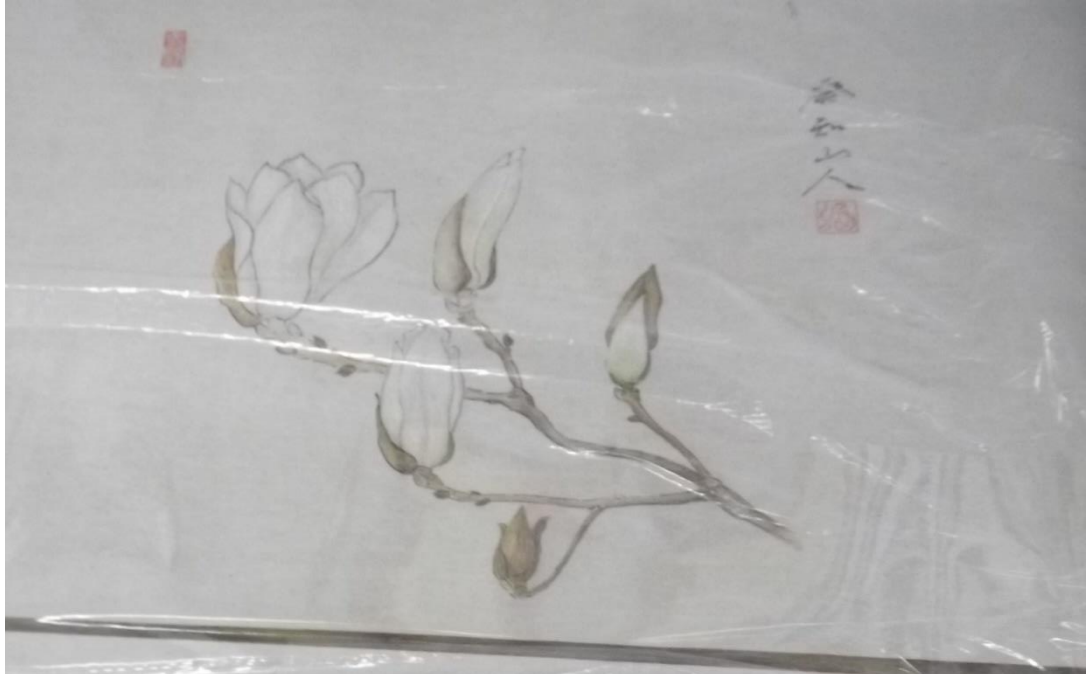

貳瓢山人


貳瓢山人


貳瓢

武瓢山人

武瓢山人



ご覧いただきありがとう
ございました。

多磨俳句会